# 新方

## 現地説明会資料

其の二

平成十一年十一月十四日
神戸市教育委員会

今回の調査にあたっては、京都大学霊長類研究所教授　片山一道先生、大阪大学文学部助教授　福永伸哉先生、（財）ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長　工楽善通先生の各先生にご指導とご教授をいただきました。また、野手・西方地区土地区画整理組合のご協力をいただきました。

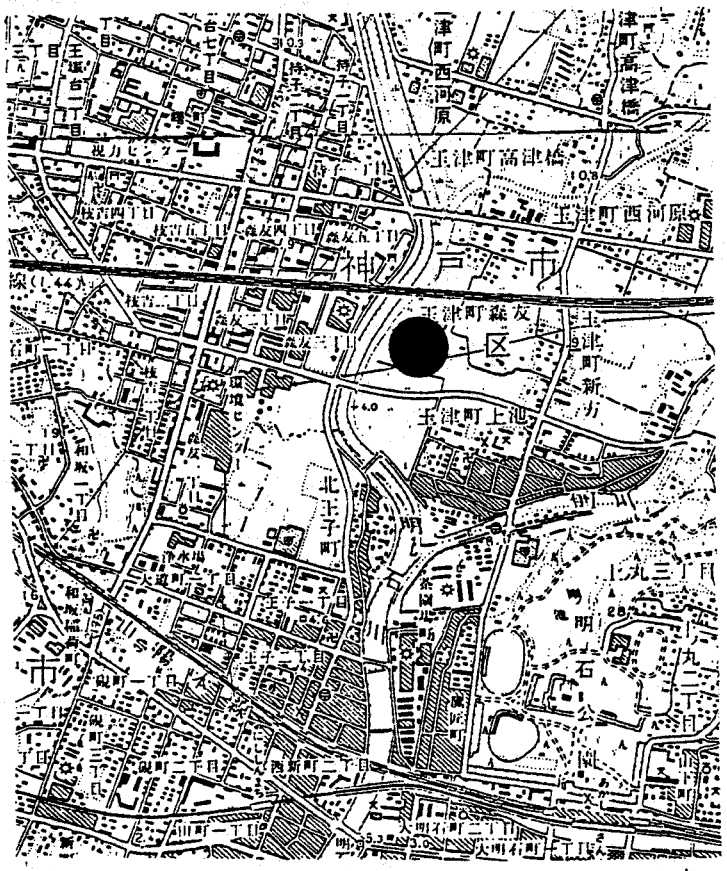
## 1．はじめに

新方遺跡は、明石川と伊川の合流する地点の北側、標高8～10mの沖積地に位置しています。昭和45年に山陽新幹線建設に伴う調査で発見されました。これまでの調査で、旧石器時代から江戸時代にいたる複合遺跡であり、東西約1.5km、南北約1kmの広がりを持つ事が判明しています。豊富な遺構や遺物が検出されており、各時代を通して、重要な集落であった事が伺えます。特に新方遺跡を特徴付けるものとして、古墳時代の玉造工房集落、大形の掘立柱建物群、弥生時代の大規模な方形周溝墓や近畿地方最古の弥生時代前期の人骨の検出などがあげられます。

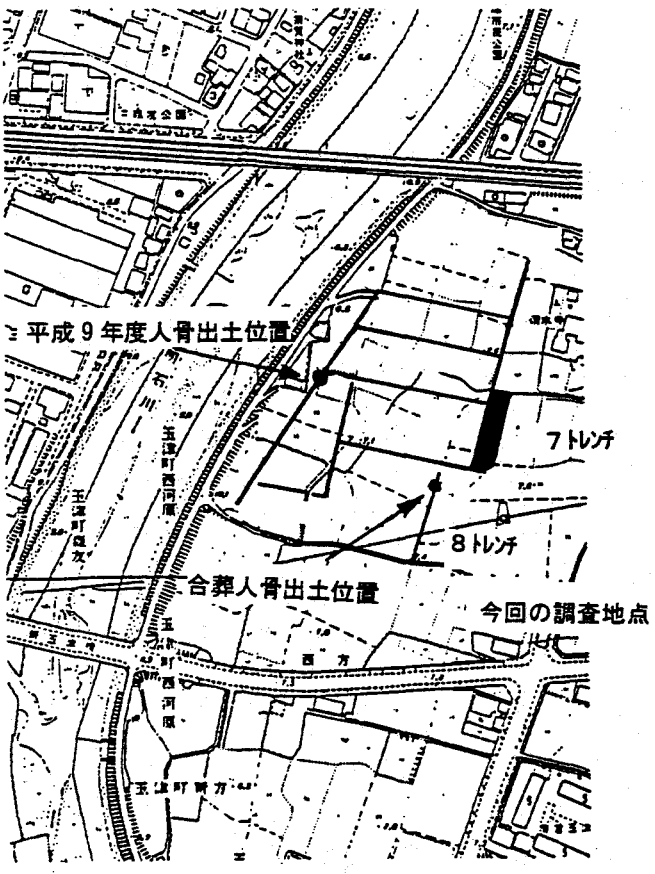
野手・西方地区の調査は、震災復興事業の一環として、住宅供給を目的とした土地区画整理事業を行うために実施している、遺跡の範囲確認調査です。今回の調査対象面積は約800㎡で、現在までに、古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物群、弥生時代中期の区画溝、土坑、墓などが検出されています。

## 2．立地

これまでの調査結果から、弥生時代から古墳時代の地形を復元してみますと、事業区域のほぼ中央に低湿地が存在し、遺構や遺物の出土がほとんど見られない場所があります。弥生時代前期には、低湿地の両側に一段高い微高地が東西に存在し、特に東側の微高地上から、多数の遺構が検出されています。西側では、調査区が微高地の縁辺部に辺り、方形周溝墓などの埋葬遺構などが検出されました。このことから、低湿地を食料などの生産域に利用し、微高地に生活域や墓域を設けていたことが伺えます。弥生時代の住居は、前期の竪穴住居が1棟確認されているのみで、居住域の場所は明確ではありませんが、区画溝や土坑に多量に廃棄された遺物量から、近接した場所に住居群が存在することが考えられます。




調査地位置図　野手西方地点

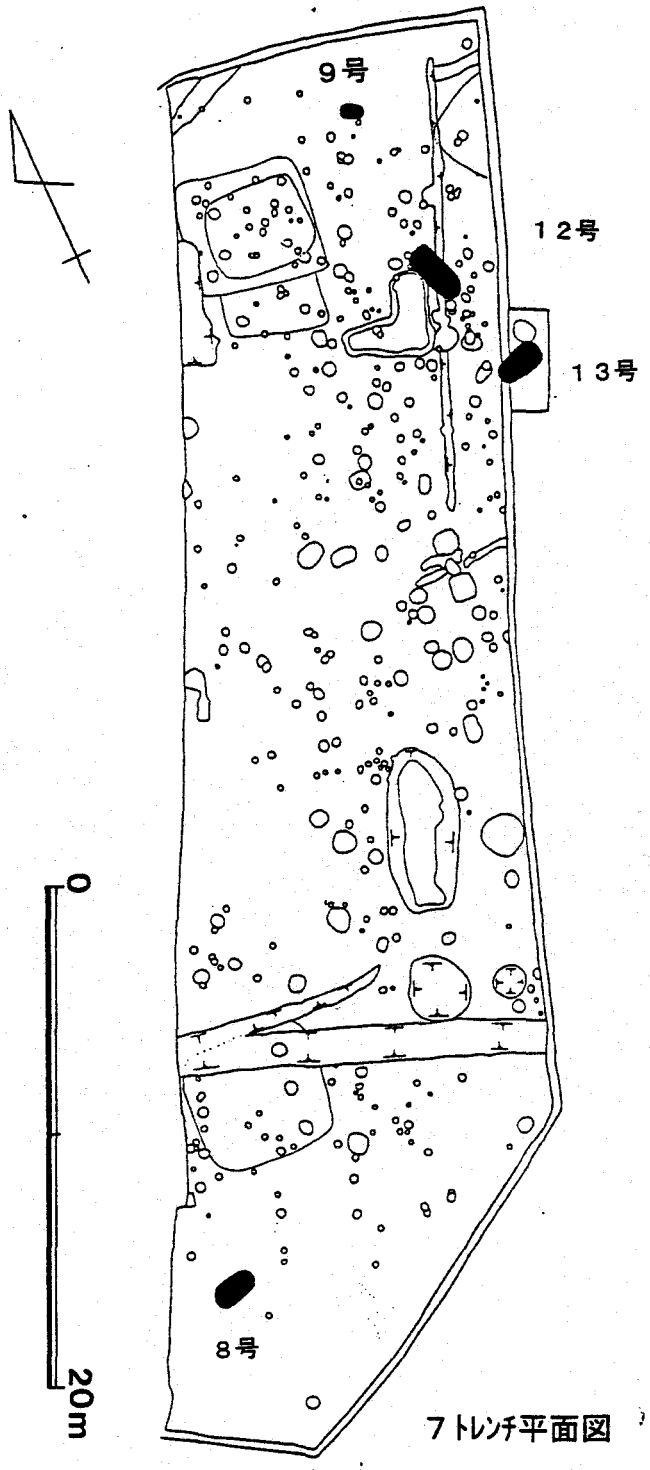



トレンチ配置図

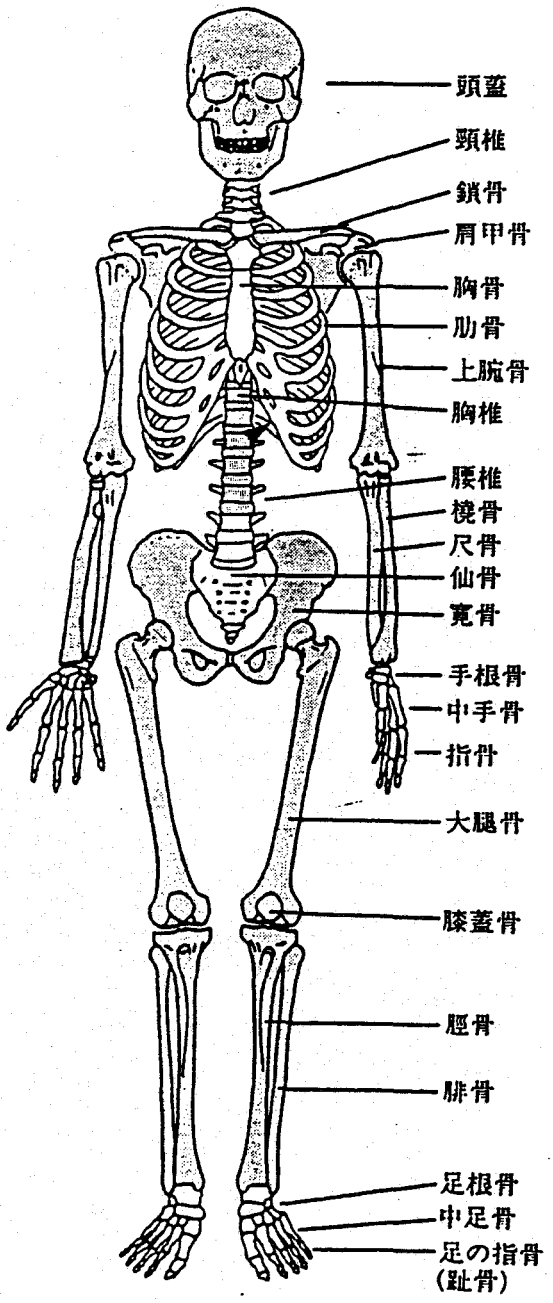
弥生時代中期になると、低湿地が洪水層で埋まってしまい、古墳時代に至るまで、ほぼ水平な堆積状況が確認されます。弥生前期に掘られた区画溝も一部埋められ、土地利用に変化があったことが確認されています。遺構の分布は、両側の微高地上に密集しており、低湿地であった個所は、水田などの食料生産域として利用していたようです。

## ３．今回の調査

現在、調査を行っている遺構面は、現在の地表面からわずか50ｃｍ下で検出されました。本来はもう少し堆積していたと考えられますが、今回の調査区は、古墳時代中期に大きく削平を受けているために、弥生時代前期から古墳時代前半の遺構が、非常に浅いところから検出されました。調査中であるため詳細は不明ですが、多量の遺物が出土している弥生時代中期の区画溝や、古墳時代前期から中期の竪穴住居などの他に、弥生時代前期から古墳時代中期の埋葬施設が検出されました。今回は、埋葬施設から出土した人骨を中心にご説明いたします。




７トレンチ平面図



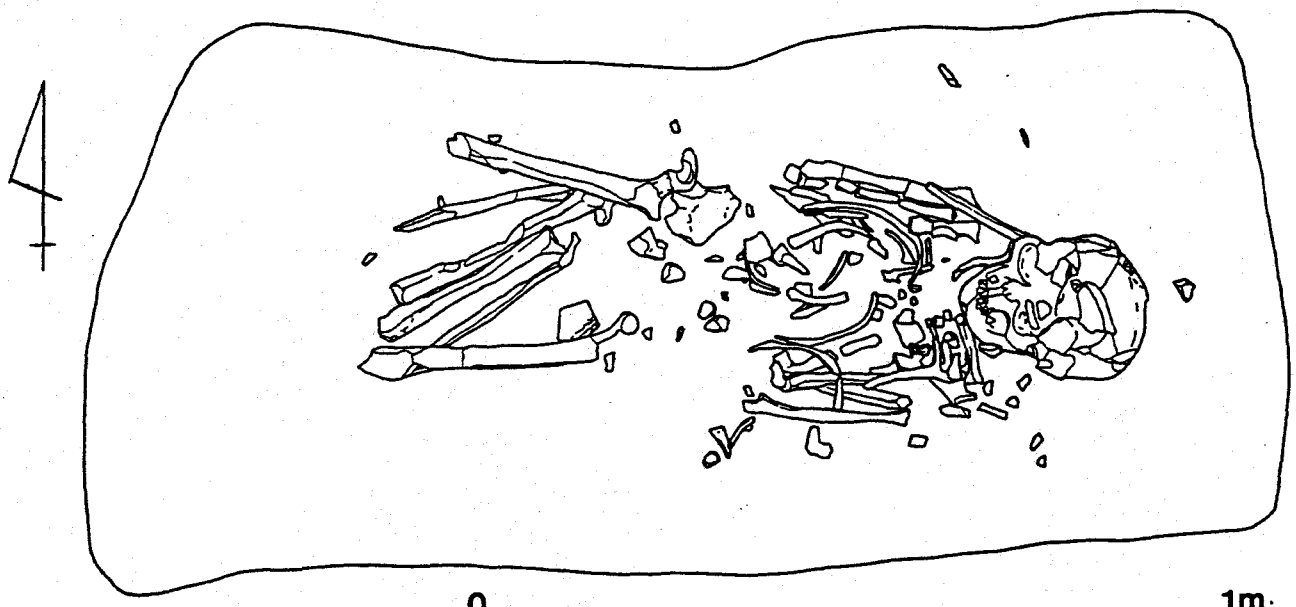

人骨各部の名称

## ４．人骨の概要

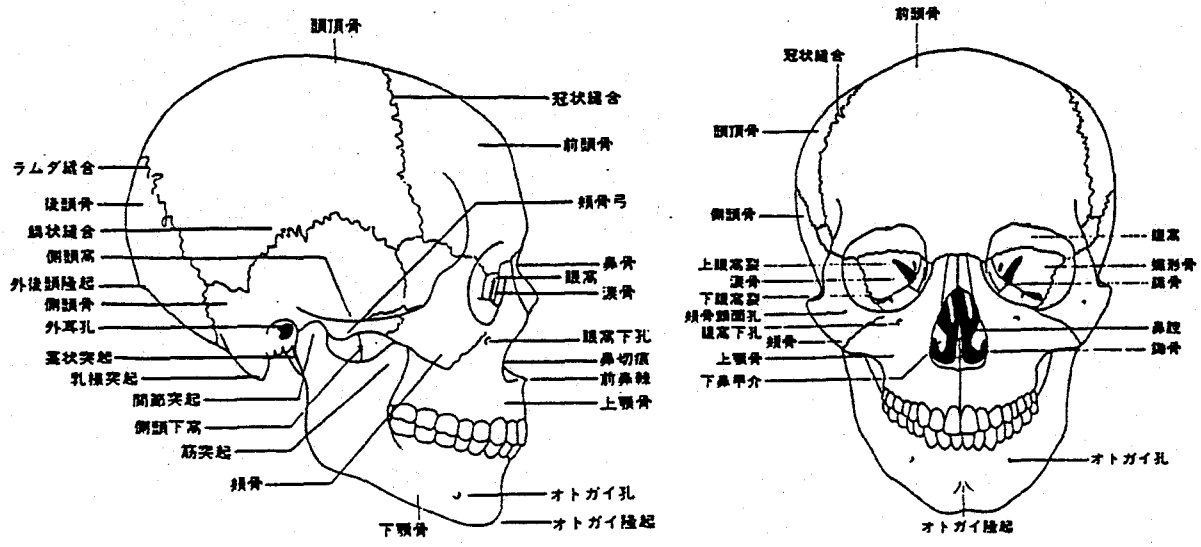
**○第８号人骨（古墳時代中期）**

長辺約 125cm、短辺 46cm の大きさの方形の墓坑から検出されました。一般の女性で、死亡年齢は熟年（40～60 歳）です。埋葬姿勢は仰向けで、手足の骨が関節部分で切られ、正座した状態で後ろに倒した姿勢で出土しました。頭位は東方向です。頭蓋骨は、顔の部分が土圧で陥没していますが、女性にしては頑丈で厚さもあります。顔付きは、寸詰まり気味で頬が張り、平たい顔立ちをしています。一方、身体はきゃしゃで、身長が 145～150ｃｍと、この時代の女性としては小柄です。また、右の奥歯には強い咬耗（磨り減り）が見られ、咀嚼（噛み砕く）以外に、獣皮やひも状のものをなめすために、歯を使っていたようです。

これまで、古墳時代の人骨は、古墳などの埋葬施設（石室、石棺、木棺など）から出土した資料がほとんどで、有力者の人骨資料しかありません。今回のように、一般の人々の人骨が良好な状態で出土した貴重な例です。



第８号人骨検出状況平面図　0　1m




右横から　　前から

頭蓋骨各部の名称

「歯の解剖学」1994より一部改変

○第９号人骨（古墳時代中期）

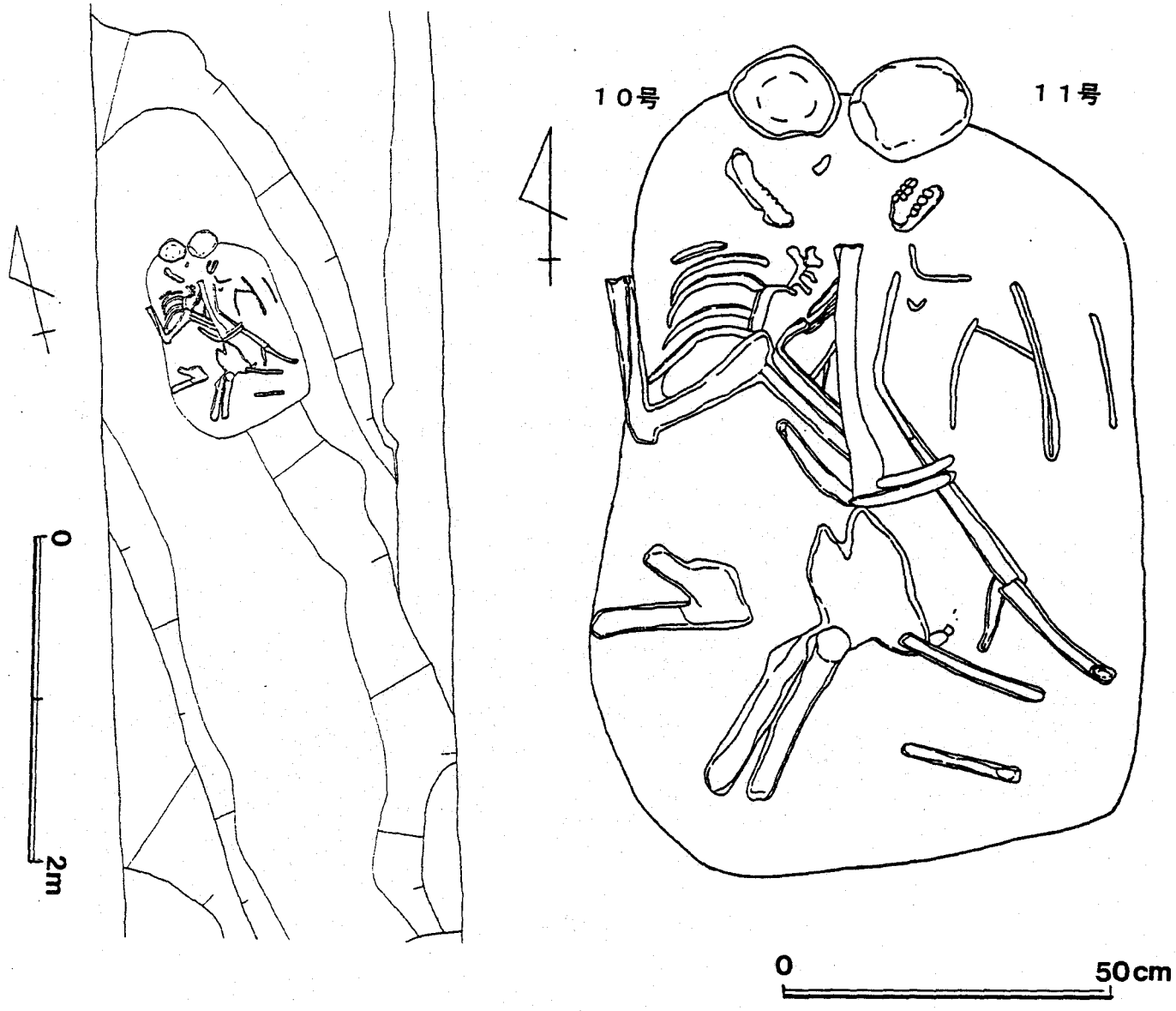
左右の腕の骨（上腕骨・尺骨・橈骨）のみが検出されました。左腕は肘を強く曲げ、右腕は左腕の上に伸ばしており、交連（こうれん）した状態（関節が繋（つな）がった状態）で検出されました。他の部位の骨は検出されませんでした。

○第10号人骨・第11号人骨（弥生時代中期以前）

幅260㎝、深さ60cmの溝の底から、長辺97cm、短辺65cmの不定円形の土坑が検出されました。その土坑から、2体の人骨の痕跡が検出されました。

2体共、非常に保存状況が悪く、かろうじて骨の痕跡を留める程度でしたが、数本の歯のエナメル質が残されていました。頭位は共に北方向です。上下の歯を噛（か）み合わせた状態で検出された第11号人骨は、20歳以上の成人だと考えられます。

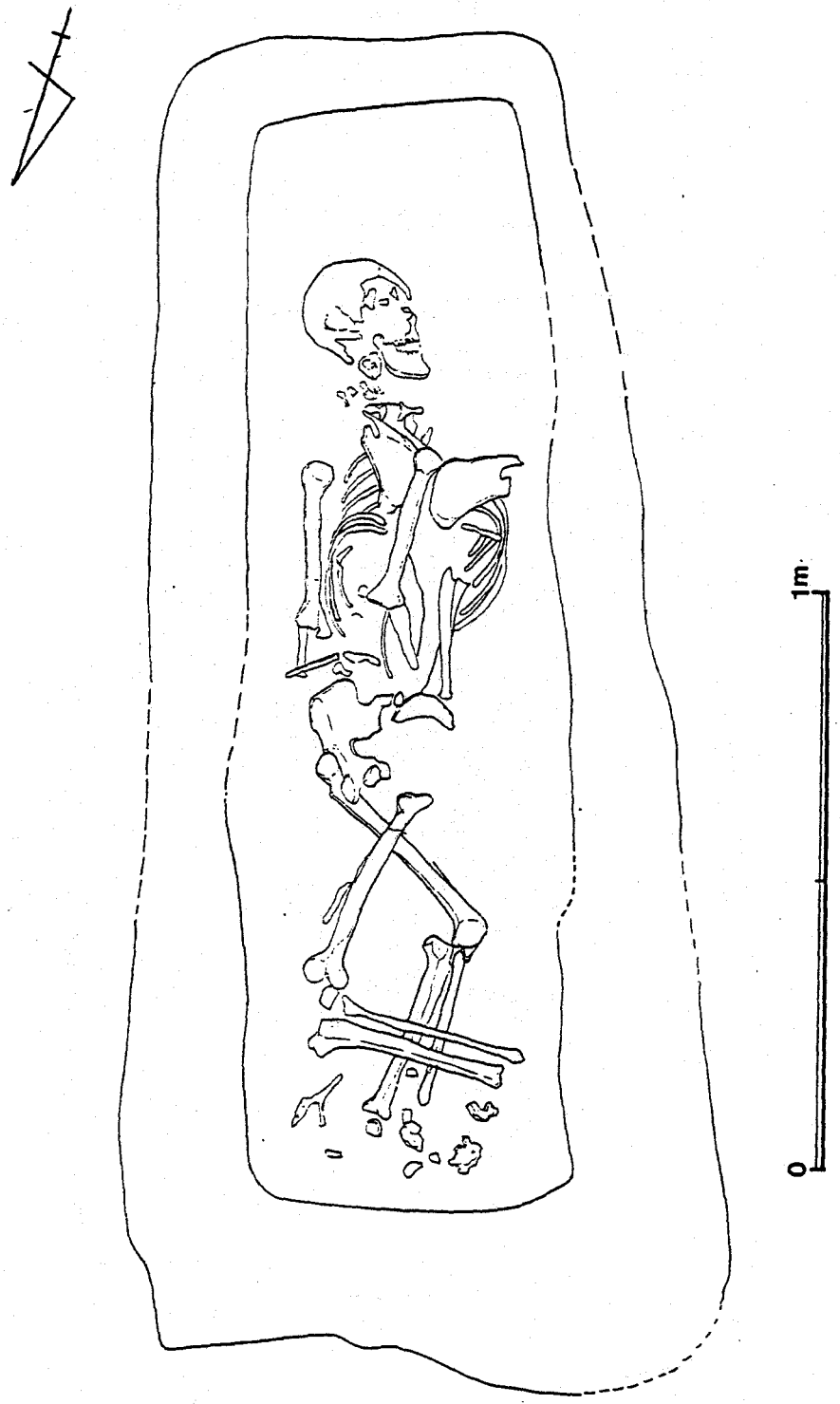
溝の底に墓坑を設ける例は、周溝墓の周溝内によく見られますが、溝の規模や、直行する溝が30m以内にないことから、単独の溝であると考えられます。平成9年度の調査で、溝の規模は小さいですが、溝の底に墓坑を設ける例が確認されており、同様の遺構ではないかと考えられます。




第10号・第11号人骨検出状況平面図

○第１２号人骨（弥生時代前期）

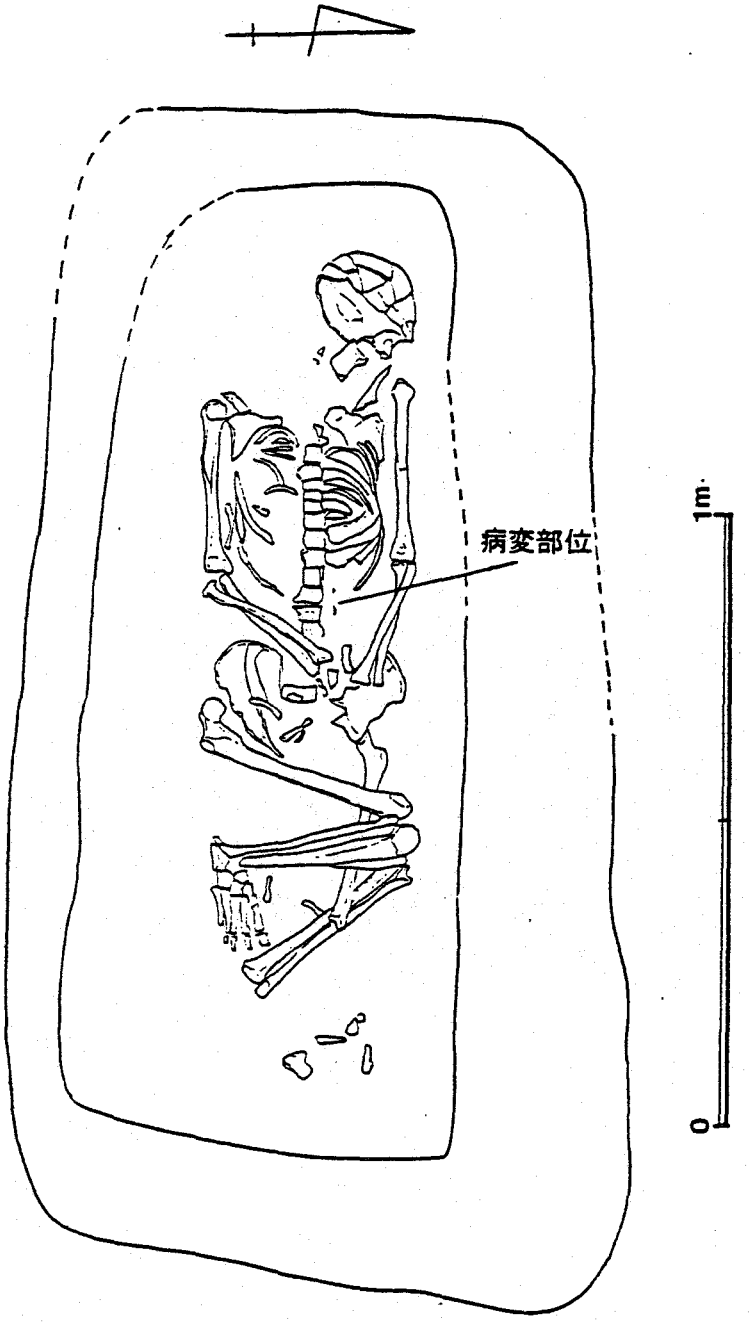
長辺 226cm、短辺 90cm の方形掘形に長辺 190cm、短辺 58cm の木棺の痕跡が検出されました。棺内で検出された人骨の保存状況は良好で、ほぼ全身の骨が残っています。身長 160ｃｍ前後の男性（30～40 歳）で、うつ伏せの埋葬姿勢で埋葬されています。頭位の方向は南ですが、顔は西側を向いた状態で検出されました。右上犬歯がなく、抜歯をしていると考えられます。歯槽性突顎(上顎の前の部分が突き出ている状態)がかなり強い顔立ちをしています。左腕は折り曲げられており、右腕は肩甲骨の上で検出され、原位置を留めていません。両脚は複雑に交差しており、特異な埋葬姿勢です。また、棺内から石鏃が１点出土していますが、人骨との関係は明らかではありません。




第 12 号人骨検出状況平面図

○第１３号人骨（弥生時代前期）

長辺 191cm、短辺 97cm の方形掘形に長辺 159cm、短辺 62cm の木棺の痕跡が検出されました。棺内で検出された人骨の保存状況は、極めて良好で、頭蓋骨の右顔面部分を失っていますが、左下肢骨以外は、全身の骨格が原位置を保っています。頭位は西方向で、第 12 号人骨と、埋葬方向が直交しています。死亡年齢は 50～60 歳で、身長 155 cm程度の女性です。膝は強く曲がり、仰向けに埋葬されています。脛骨は扁平で、腓骨は大きく、第 12 号人骨と比べると、縄文人的な要素を残しています。左大腿骨と、脛骨・腓骨の位置が不自然で、本来、両膝を立てて埋葬されたものが、移動した可能性が高いと考えられます。腰椎に異常な増骨腫が見られ、病気による変形と考えられます。恥骨の前方または右大腿骨付近で、石鏃が検出されましたが、出土位置から、人骨に伴う遺物であるかは不明です。




第 13 号人骨検出状況平面図

## 5. まとめ

同一の遺跡内で、弥生時代前期から古墳時代の人骨が、良好な保存状況で見つかり、第1次調査の成果とあわせ、同一地域での、人骨の形質学的変化を確認できる資料を得ることができました。

弥生時代の人骨である、第12号人骨・第13号人骨に関しては、近畿の弥生時代人骨の中では、もっとも保存状況がよく、当時の人々の体形や顔立ちが確認できる資料といえます。近畿では、弥生時代前期の人骨資料がほとんどなく、当遺跡で複数体出土していることは、前回の資料を含め、縄文時代から弥生時代にかけての人々の形質的な変化の実態を明らかにできる資料であるといえます。

今回検出された弥生時代前期の人骨（第12号・第13号）は、後の古墳時代人などを彷彿とさせる特徴を持っており、うつ伏せ埋葬、抜歯など、第1次調査で検出された人骨との共通点はありますが、形質的には、縄文人的な要素は希薄です。双方を比較することにより、時期差が人々の身体特徴の変化に影響を与えた可能性を考えるために、有効な資料といえます。

第13号人骨は、腰椎に病気による変形と考えられる異常な骨増殖がみられます。古人骨で病気の痕跡が確認できる例は珍しく、弥生時代の人々の病気について考える上で、非常に重要な例となります。

埋葬施設に関しては、伝統的（縄文時代的）な埋葬姿勢（屈葬）で、幅が広く短い木棺に埋葬される事例（第１３号人骨）と、大陸の影響を受けた埋葬姿勢（伸展気味）で、細長い木棺に埋葬される事例（第１２号人骨）が確認されました。埋葬方向は、互いに直交しており、人骨の形質にも差異が見られることから、この違いは、系統（出身集団）の違いを示しているのかも知れません。弥生時代開始期の、異集団交流や、集団の成り立ちを考える上での好資料と言えます。

古墳時代の第８号人骨は、古墳時代の集落内の墓から検出された極めて珍しい例です。現在までに確認されている古墳時代の人骨は、有力者の墓である古墳の埋葬施設からの出土したものがほとんどで、今まで明らかではなかった一般の人々の姿や埋葬姿勢を復元できるかけがえのない資料であると言えます。

# 出土人骨の詳細（参考）

## 古墳時代中期

### ○8号人骨

保存状況　ほぼ全身骨格が残る。

性別　女性

死亡年齢　40から60歳（熟年）

体格　華奢（小さい）しかし、頭蓋骨は大きく、非常にアンバランス

姿勢　頭位は南東方向である。
仰臥（脛は下に折り込んでおり、特殊な埋葬）
右尺骨、肋骨の一部、右大腿骨は原位置を保っていない。
寸詰まりな顔つきで、頬骨が張り、平坦。

身長　145から150センチ。（大腿骨、尺骨の概測値から）

頭部　大きく頑丈。矢状縫合は融合し、冠状縫合も強く融合している。

下顎　細く長い。

歯　左下第1大臼歯と左下第2大臼歯に鞍状咬耗が見られ、歯冠はエナメル質が磨耗するほどである。咀嚼以外の用途（皮革や繊維状のなめし）に使用されたと考えられる。

鎖骨　小さく華奢、細い。

上腕骨　三角筋粗面が弱い。

大腿骨　柱状性が弱く、大腿四頭筋は弱い事が推測される。

脛骨　ヒラメ筋が弱い

その他　肘、膝部分で、強く関節を曲げられており、腱や靭帯を切断して折り曲げられた可能性がある。

### ○9号人骨

保存状況　左右の上腕骨・尺骨・橈骨のみ残存。

姿勢　頭位は北方向である。
左腕は肘を強く曲げ、右腕はその上に肘を伸ばした状態で検出。
残存している骨は、交連状態にある。

その他　他の部位の骨は検出されていない。

## 弥生時代中期前半以前

### ○第10号・11号人骨（2体埋葬人骨）

保存状況　頭蓋骨、上下の顎骨、肋骨、四肢長骨の痕跡が残るが、完全に腐食しており、いささかも形態は読み取れない。東側の人骨の歯が残る。

2体分の人骨が存在することは間違いない。

姿勢　頭位は北方向である。

両脚を曲げている可能性があるが、不明である。

性別・年齢は一切不明

## 弥生時代前期

### ○第12号人骨

保存状態　極めてよい

性別　男性

死亡年齢　壮年後半（30から40歳）頭蓋骨の縫合がよく融合している。

姿勢　俯臥。脚部は不自然に交差している。

身長　160cm前後。

頭部　小さい。縫合はかなり癒合している。位置は体軸線から左側にずれ、左顔面を下にした状態。

上顎骨　歯槽性突顎がかなり強い。

下顎骨　上顎骨に交連した状態。下顎枝は細身で小さい。

歯　咬耗は少ない。

右上犬歯は抜歯の可能性が極めて高い。

上切歯は、内側に向けて咬耗している。

上切歯の表側もシャベル状に窪む。

肩甲骨　上腕骨との位置関係から考えて、左右とも、原位置をとどめているとは考えがたい。

右肩が若干上がった状態で埋葬された可能性がある。

肋骨　どの骨も、きれいに原位置をとどめる。

上肢骨　右上腕骨は肩甲骨の上で検出され、原位置を留めていない。

左尺骨、左橈骨は、掌が下方を向く状態で、左上腕骨の下に折り曲げられている。

腰骨　左腰骨は良好に残存。右腰骨は一部欠損。

大腿骨　湾曲が強い。左大腿骨は、寛骨・膝蓋骨・脛骨・腓骨と交連状態である。

大腿骨の交差は、正常な状態では不可能な姿勢である。

脛骨　扁平性はそう強くない。

足骨　原位置から大きく動いている。

その他　不自然な状態の骨格部位が多い。（頭骨の位置、右上腕骨の位置、下肢骨の交差状態など）

扁平脛骨、柱状性大腿骨などの縄文人的特長は見られない。

足骨付近に別個体の骨片が出土している。

○第 13 号人骨

保存状況　頭蓋骨の右顔面部分を失っているが、ほぼ、全身の骨格が良好に残り、左下肢骨以外は原位置を保っている。

性別　女性

死亡年齢　壮年から熟年（50～60 歳）

姿勢　仰臥屈葬

身長　155cm程度。

頭蓋骨　かなりの長頭。眉上隆起が女性にしては高い。

下顎骨　華奢。角前切痕あり。歯槽が低く、すべての大臼歯が抜け落ちている可能性がある。

上肢骨　腰の上に手を置いた自然な状態。

椎骨　腰椎に強度の嘴状骨増殖が見られる。骨体部分も異常が見られる。

下肢骨　右大腿骨概測値は 420mm。

脛骨は扁平。腓骨は大きい。

左大腿骨と、脛骨・腓骨の位置が不自然で、本来、両膝を立てて埋葬されたものが、移動した可能性が高い。

その他　右寛骨上にイノシシの牙製品（？）が存在。副葬された可能性あり。

恥骨の前方または右大腿骨付近で石鏃が検出されたが、出土位置から、人骨に伴う遺物であるか不明である。